

保育所運営費が増大

保育行政の実情を探る

超過負担が市財政を圧迫



(保育所で遊びまわる乳幼児)

次代をになう子どもたち。このことばたちに、成長の手をさしよけていくことも、市のしごとのひとつです。

市では、働くお母さんが、安心して預けられる保育所づくりに取り組んでいます。ところで、保育行政を進める上で、大きな問題点を抱えています。それでは、その問題点をさぐってみましょう。

ふえる乳幼児。この乳幼児。現在、市立保育所六つと見を抱えた働くお母さんに、私立保育園とで、八百五十は、安心して預け、働ける。五名の乳幼児を保育している保育所が必要で、

保育所は、幼稚園とまたちがった性格をもっています。保育所は、保育に欠ける児童を保育することを目的に、家庭の母親にかわって子どもを預り、幼稚園教育に準じて保育しています。

保育時間は、午前八時から午後四時までを原則としていますが、働くお母さんのために、午前七時から早朝保育、午後六時までの延長保育を、また発育が遅れている軽度の障害児保育の実施など、内容を充実し積極的に進めています。また、パート保育の確保、介助員の雇用など、厚生省の基準外で人員を確保し、保育体制を整えています。

超過負担解消へ

運営費、財政を圧迫

しかし、保育内容の高度化と多様性が増すに伴い、保育所運営費が増大し、市の財政の圧迫要因となつてい

この圧迫要因の一つに、超過負担があげられます。超過負担とは、保育所の設置や運営にかかる実際の必要経費より、国の支出金の算定基準が下回って定められているために、市の持出



(これにしようかな)

物を大切にしよう

不用品の交換会

家庭にねむっている不用品をおたがいに交換しよう、不用品の交換会が、7月18日午後2時から、向日市民会館で行われました。

最近の物価の高騰により、「使い捨て時代」とよばれている今日の世相を反映、いまいちど、物の大切さを見直し、物価高の世をのりきろうと、市生活学校、市婦人会、西向日婦人会、向日台連合婦人部、市農業研究会の共催で開かれたものです。

交換会当日、雨にもかかわらず、家庭で使わなくなったものを交換しようと多数の主婦たちが集まり、中には、あれもこれもと、もち帰る主婦もみられ、山とつまれていた衣料品、お盆、バッグ、クツなどがまたたくまになくなりました。

また、市農業研究会の新鮮な野菜即売会もあわせて行われ、ナスやキュウリなどが飛ぶように売れて、好評のうちにおえました。

料金改正の動き

国の基準より低い

超過負担の額が、年々多額となつてきますと、保育料の問題がうかびあがってきます。

現在の保育料は、昭和四十三年以来、改正しないで堅持してきています。

保育料は、毎年度ごとの「保育単価」の決定と同時に、「国の保育料徴収基準」をもとに決定しますが、市の場合、この徴収基準より低く、昭和四十九年度は三千七百四十六万円を保護者にかわって、市が負担しています。

詩舞一筋に四十五年

いまや老後の楽しみに

(大きな声で語る瓜生さん)



四十五年間、詩舞一筋に歩んできたおばあさんがいらっしゃいます。その方は瓜生よし子さん(寺戸町二枚田四一九七)。大きな声で、詩舞の楽しさを語っていらっしゃいました。

「詩舞をやっているとよかったです。詩をうたい、剣舞を舞うのも、お腹に力を入

昭和十一年に師範の免許を取得、以後ずっと教えていらっしゃいます。流派は神心流。

「社会が大きく変わりましたが、この社会情勢にそって、昔気質をもちつづけ、これからは生きていきたい。また、詩舞を習いたいと思っていられる方がありましたら、気楽に誰でも無料でお教えしますよ。」とこれからの抱負を語っていらっしゃいました。

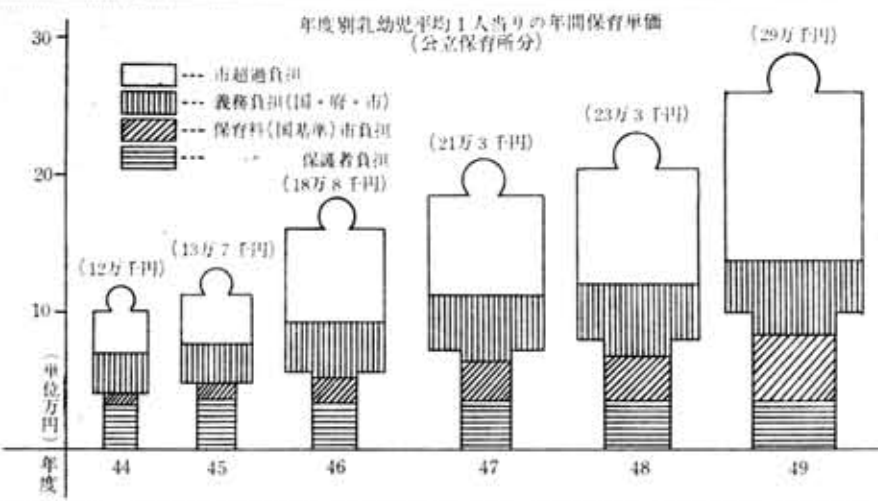
別れがわ、それではひとつと、お弟子さんを相手に詩舞をうたわれ、けいこをつけられていたけれど、よくはりのある声で、扇をもつ手ぶりも、とても高齢とは思われませんでした。

詩舞一筋に四十五年、これからは健康に気をつけられて、ご活躍されることを期待しています。

審議会を設置

十月実施で検討

そのため、昨年十一月、「保育所措置見保護者負担金適正化審議会」を設置、保育料の適正化を審議しました。その結果、ことしの三月四日に答申を得ました。



審議会の答申では、乳幼児の福祉を守り高めるには、現在の財源の限界をこえた負担を期待しないで、一定程度の負担が利用者にもなされるべきであろう、という内容でした。

市では、この答申に基づき、保育料の適正化をはかる方針で、十月実施を目標に、準備を進めています。

健全な保育所運営と市財政への負担軽減のため、保育所保護者ももとより、広く市民のみなさんのご理解とご協力をお願いします。

音の暴力追放。
夜遅くまで、テレビやステレオなどの音量を大きくして聞かないように、注意しましょう。

「子どものいのちを守る運動」

「夏休みの子どものいのちを守る運動」が、始まっています。子どもを交通事故から、水の事故から、あぶない遊びから、守ってあげましょう。

